

個人の部屋は人に何を伝えるのか

学籍番号 12042028 黒石 昌吾

担当教員 立木 茂雄

## 要旨

本稿では他者に対する個人の部屋に着目している。部屋が外から訪れる他者にどのような働きをして行為に影響を与えるのか探ることが本稿の目的である。調査としては実際に10人の知人に協力を頼み、各々の部屋を実際に訪問して撮影させてもらった。その際の反応や部屋の状態などをまとめ、考察することで部屋が持つ能力を探った。その結果として部屋とは相手との関係性において操作され、様々な姿に変化するものであるということが分かった。特に関係が浅く広い他者との関わりが多くなる大学生以降にできた友人の部屋は整頓されて多くの秘密は隠され、強調したいものだけが押し出されていた。逆に日常生活など多くの面で関わりを持ってきた人間については多くのものを隠さなかった。このように部屋とはただ個性的な面を見せるのではなく相手との関係性や相手についての情報量が状態として表れ、示される能力を持つということが分かった。

**キーワード：** 日常生活と他者、自己の印象操作、他者の統制、秘密と信頼

## 目次

はじめに	…3
1 問題提起	
1.1 なぜ人は部屋に執着するのか	…4
1.2 仮説	…5
2 先行研究	
2.1 自我の形成と他者の存在	…6
2.2 自己の演出	…7
2.3 部屋による印象操作と他者の統制	…9
3 部屋が呈示するもの	
3.1 訪問と撮影による調査	…11
3.2 訪問と撮影の結果	…12
4 比較と考察	
4.1 部屋と交友関係	…21
4.2 部屋による自己呈示の種類	…25
5 結論	…27
おわりに	…28
参考文献リスト	

## はじめに

大学生になり、兵庫県の片田舎から京都にでてきた私は一人暮らしを始めることとなった。実家での暮らしとは違い一人で生活を送っていく感覚は私にとってとても新鮮なものだった。大学生活にも慣れて一人暮らしが新鮮ではなくなったころからよく考えるようになったのは嫌でも毎日見ることになる自分の部屋についてである。

最初のころはただ生活に必要なものを置いて寝ているだけの状態だったが新しい生活に慣れていくうちに少しずつ自分の部屋に変化を与えたいと思うようになっていった。私は部屋を自分にとってより住みやすい空間、自分にとってより気持ちのいい空間にしたいと考えて本棚やベッドを配置したり色や形に気を使ったりした。時には収納グッズを買ってきて普段あまり使わないものをまとめ、またクローゼットやベッド下も活用することによって少なくとも表面上は綺麗な状態を保とうという努力をしたのである。加えて勉強に使う本や趣味の本、漫画本などもしっかり分類して並べ、極力棚に戻すようにした。このような努力を経て自分の部屋における私の落ち着きある状態は保たれているのである。それと同時に私は友人より多く付き合いの浅い知り合いが増える大学の人間関係に対していつ人を迎えることになっても対応できるようにしていた。部屋が汚いということは私自身のマイナスイメージになることから常に身構えた状態だったのである。

また、友人たちの部屋に遊びに行くと全ての部屋にその人の個性や統一されたものを感じることができた。服装のように明らかに他者に見せることを前提としたものほど部屋が注目されることはないがそれゆえに違う視点から感じる個性がある。高校や中学からの友人もいれば大学やアルバイトの友人もいるがそれぞれに乱雑さ、いい加減さもあれば厳格さや神経質なところもあり、人それぞれの間人像を見せてくれた。飾ったり隠したりする人だけでなく全く私生活を隠さないような人もいた。しかし逆にその部屋が彼の飾らない性格を私に呈示してくれたのである。

このような部屋が見せる個性と自分自身の部屋に対するこだわりから部屋を通して自分のこと、また他者のことを知りたいと考えて部屋を中心とした卒業論文を書くことに決めた。本稿では実際に数人の友人に協力してもらい、撮らせてもらった写真をもとに物言わぬ部屋が私に何を語りかけるのか他者が部屋にどのような感情を込めて私を招いているのか考察したい。そしてそのなかでこれまで考えもしなかった自己の一面や他者の一面をこれから感じ取れるようになれたらと思う。

## 1 問題提起

### 1.1 なぜ人は部屋に執着するのか

人の家を訪問するとき、多くの場合少し入り口で待つように言われる。そして部屋の状態確認や整頓、清掃などを部屋の住人が済ませた後に入室の許可を得る。このような経験は珍しくないだろう。なぜそこまで部屋に他人を入れることに対して警戒する必要があるのか訪問者の立場ではしばしば疑問を感じてしまうこともある。普段とても親しく交流を持ち、多くのことを知っている相手ですら部屋を訪ねる場合にはそれほどの用心深さを発揮することが多いのだ。逆に考えれば自分の部屋とはそれほど特別でかつ普段外では見せていないような自己の一面が隠されているのではないだろうか。

多くの人にとって自分の部屋とは特別な空間である。普段は自分をリラックスさせ、家族にすらも秘密を保持することのできるまさに自分のための特別な空間だ。それゆえに多く人は部屋にこだわりを持ち、普段は不可侵の場所としている。他者の侵入に関してはほとんどの人がみな慎重である。大抵の場合訪問者はまず約束を取り付けること、つまり相手の許可を得ることが必要になる。そしてやっと訪問すれば次は行動の制限を強いられる。何をしても住人の許可を必要として行動することとなり、自由に動くことは不可能である。仮に何かする許可を得たとしても多くの場合慎重な行動が必要である。部屋を乱し、汚すような真似は決して許されない行為なのだ。よって人に対して気を遣う場面では相手のみならず部屋に対しても人は気を遣い、丁重にあるように期待される。そして人はその期待に応えるかのように行動する。だが、ただ座ってその空間にいるだけでも訪問者の目には多くの情報が飛び込んでくる。住人についての多くの情報を部屋という空間から得ることが可能だ。そこにある飾りも人形も小道具も物理的な広さも住人の人となりを表すものとして訪問者の目には映る。住人が他者を警戒する必要があるのはそのような能力を部屋が備えているからだろう。本稿ではそのような人と人が接する場面における部屋の役割、部屋の能力とはどのようなものなのか少しでも明らかにしたい。

### 1.2 仮説

部屋とは多くの情報を抱えている場所である。それゆえに隠しておきたいもの、他者の目には触れさせたくないものも多くある。そしてその隠しておきたいものこそが外で表現する自己のイメージとは反する純粹でありのままの姿であろう。他者には見せられないそ

の一面が露呈する可能性を多くはらんでいることが人に部屋を強く意識させる要因であるのはまず間違いない。見られたくない一面が露呈することによって自己のイメージは崩され、他者との関係が変化してしまうからである。そのときこれまで築き上げてきた他者の評価が大きく崩れるという不安はみな持っているものだろう。

人は人に自己を見せるときには外見を気にする。自分に合った、もしくは世間に恥じないような格好を選択して他人に非難されないような態度をとる。だが、部屋は物理的には固定的なものなので外見や態度と違い大きく変貌させることや装うことが難しい。だからこそ部屋を操作することがまず根底にあり、部屋に適応した振る舞いや言動、外見を作り上げることがコミュニケーションを成り立たせているのではないかと思う。そのことから部屋にある機能とは外見のように見せるということよりも自分にとって不都合なものを隠すことに重点を置いているのではないかと考える。普段の姿を見せない、多くのものを隠す機能こそがコミュニケーションにおいて部屋が担う重要な役割であるということである。ゆえに他者を招くときの部屋とは外見や態度以上に他者を意識し、他者に見せたい状態、逆に言えば他者に見せられる状態のみを用意して自己を呈示しているという仮説が立てられる。このことについて考察、検証していきたい。

## 2 先行研究

### 2.1 自我の形成と他者の存在

G.H.Mead (1934=1973)は人間の自我は他者、つまり社会集団と関わり、経験を積む中で生じてくると述べた。その方法とは他者の態度を取得することによって始まる。他者の態度が意味するところほどのような意味をもつのか演じることで客観的に自分を見つめ、客観的に見る自分の姿を知るようになるのである。さらにルールを持った行為を他者とする中で多くの人と関わり、多くの人々の期待に応えることを要求されるようになるのだ。そのとき多くの人々の期待に同時に応えるというのは非常に難しい。ゆえに多くの他者の期待をそこでまとめあげて一般化する必要がある。組織化し一般化することによって期待に応えるということは以前と比較すれば容易なこととなる。そのとき形成されるのが Mead (1934=1973)が述べる一般化された他者である。人は社会生活においてこの一般化された他者の期待に応えることが常に要求される。遊びにおいてはルールといった形でこれは存在し、場によっては規範や美德などといったものとして場を支配している。このように一般化された他者とは個人が所属する集団または広く社会全体の態度という形で表されるものとなり、この期待に応える中で人間の自我は形成されていくのだという。この一般化された他者の態度を感じ取る能力こそが自己を語るうえで重要なものとなる。

また、Mead (1934=1973)によると人間の自我とは 2 つの側面から成り立っているという。1 つは Me と呼ばれるものだ。これは組織化された他者の期待をそのまま受け入れたものである。部屋によって他者になげかけられるものもこの Me による他者の期待に応えようとする働きによると考えられる。対するもう 1 つは I と呼ばれるものであり、Me に対して反応することで多くの個性や創造性を示すことを役割とする。I の働きこそが人間の新しいものを生み出していく魅力ともいえるのである。常に表に立ち、主役として他者に認識されるのは他者の期待に応える Me である。Me の働きが部屋を整頓させ、人を迎えるに相応しい姿を取らせる。だが他者、もしくは自分の属する集団に変革をもたらすのは I の力によるものだ。Me が起こす期待通り、悪く言えば型どおりの行動に反応して個性を發揮し、なんらかの修正を加えることで自己の行動に変化をもたらす。自己の行動が変化することによって集団に与える印象は変わり、自己に求められるもの、態度は変化していく。結果として I の働きが自己を変えることで集団の態度も変化させることができるのである。部屋においても同様に他者が期待するように部屋を調整することに対して自己内での反応がある。

そうすることで部屋にも期待とは違う、型にはまらない個性が表れるはずだ。

ここまで述べてきたことは自己を表現するうえで当然関わってくる。他者の態度を取得することが客観的な視点をもたらす。そうすることで感じるようになる他者の期待とは他者と関わる場面全てに登場してくる。一般化された他者の期待とはもちろん自己を表現するときに表れるものである。自己を客観視する能力がこのとき役立てられ、外見という形にしる、言葉遣いや態度にしる、そして場所や部屋を意識した行動に表れてくる。コミュニケーションにおける大部分が一般的な他者の期待によって成り立っているのだと言える。部屋に隠されるものも相手との関係性のみならず一般的な他者に見せられないと感じるものを常に隠す傾向があるのではないかと考えられる。

## 2.2 自己の演出

E.Goffman (1959=1974) は室内の社会生活における相互行為を劇場におけるパフォーマンスに例えている。行為の主体、つまり彼がいうところのパフォーマーは舞台上の役者のようにその役目を負い、それをこなすことで観察者である周囲の人間たちに自己を表現するのである。観察者である周囲の人間は舞台上のパフォーマンスを見守る観衆、つまりオーディエンスにこの考えでは例えられる。つまり人は相互に影響を与え合うようなときに自己を飾り、周囲の環境を整え役目に応じた適切な態度をとることによって自己表現を行っているのである。そしてその目的は自己の印象を操作することにある。情報を統制し、自分を見る人々に対してしていいことはなにか悪いことはなにかを考えながら人に良い印象を持ってもらうように演技をおこなうのである。このとき作り上げられた印象は人々に真面目に受け入れてもらいたい、外見どおりの人間だと感じて欲しいパフォーマーとしての理想化されたものとなる。同時にそれは社会や世間の目から見ても理想的なものであり、他者からの期待に応えた役割どおりの自己を表したものである。それゆえに人は多くの場面で自分がそのとおりの人間なのだ自分自身に欺かれてしまう場合が多々あるという。つまり他者に対してあくまで都合よく作り上げ、それを演じている自分がまるで現実の自分であるように信じ込んでしまっているのだ。もちろんなかには自分の演じる役目に欺かれない人々も存在し、そのような人々は相手によく思われることや自分自身の行為にも興味を持たずに作り出した印象を人々に与えるとのことである。

逆に Goffman (1959=1974)が述べる観察者、オーディエンスの立場で考えると人について判断するには推論に頼るしかない。ある人物を知ろうとするときその人物が行為によっ



て表現したことを印象として受け止め、おそらくこのような性格でこのようなことが好きでこのようなことは苦手だということを予測して彼と接しなければならない。その結果として彼に期待できることと彼が自分もしくは自分たちに期待することを知り、その場の状況を判断することが可能となるのだ。ただし、相手について知っている情報の有無によってこの条件は変化してくる。相手について持っている情報が多ければ多いほど相手に対する安心感は増す。情報が多ければ多いほど彼についての推測が確実になるからである。逆に情報が全くない場合には彼の何気ないしぐさ、見た目などから読み取れるもので彼について判断するほかに方法はない。どちらにしても人が人を判断するときに絶対はありえない。オーディエンスとしての私たちは常に相手の行動を推論に頼って判断し、状況を読み取っていく必要があるのだ。また、彼が行為によって投げかけたものと矛盾した事態が起こると場の集団全体が混乱に陥るために人々はときに行為の主体となる人物の内面を察し、助けとなるのである。そうすることによって人々は主体が恥辱に満ちないように、または集団が混乱に陥らないようにする。相手を察する能力を働かさなければ劇場は成り立たない。行為者の態度を感じ取り、期待に応えられることが劇場を成り立たせる重要な要素だ。このようなことがオーディエンスに必要な能力なのだと Goffman (1959=1974)は述べている。

このように相互行為を劇場におけるパフォーマンスという視角から捉えたとき物理的に仕切られた空間はパフォーマンスが行われる舞台装置として活躍すると Goffman (1959=1974)は述べている。舞台装置は自己を表現するうえでの主役とはなりえないが背景的部分として自己の表現に大きな影響を与える一要素である。舞台装置を様々な状態に整えることでオーディエンスは多くのことを舞台装置から受け取ることができる。部屋はこのようにコミュニケーションにおいて重要な部分を担うこととなるという。状況に適した背景がなければパフォーマーの演技にも違和感が生じるからである。ただし、衣装に例えることのできる外見や態度とは違って舞台装置とは固定的なものである。生活雑貨や家具や物理的配置、その他のものでいくら飾ろうともパフォーマー本人とともに移動することはない。あくまでそれは空間的・時間的に仕切られたものであるために本人とともに移動することはできないのである。逆に外見や態度といったコミュニケーションにおける要素はパフォーマー本人と密接に結びつき、移動するものである。たとえば性別や身体、人種などの肉体的特徴はどこに移動しようともついてまわるものだ。しかも外見は服装や化粧などによって常に変化することが可能である。態度もそのときどきによって変えていくものであり、場や相手によって変化させつつ人に常についてくるものである。それゆえに外

見や態度は自己を表現するうえで非常に重要かつ便利であるといえる。本稿で取り上げる生活空間としての部屋はそのような意味では使い勝手が悪いものかもしれない。だが固定的であるがゆえに決して軽視できない、その場のみが発揮する効力で相互行為に影響を与えているのだという。短所ははっきりしているがその具体的な効力については本稿において少しでも明らかにしたいところである。

### 2.3 部屋による印象操作と他者の統制

自分について誰しもが他者に悪い印象を持たれたくない、できるだけ良い印象を与えたいと考えているだろう。Goffman (1959=1974)は自己を呈示する目的を自分に対して示される反応を統制して印象を操作し、利益を得るためだと述べた。そのために人は他者を迎え入れる部屋を整え、見た目や服装に気を配り、どのような態度で相手を迎えようかと苦心するのだという。また、それらの自分を印象付ける要素を劇的に際出せることで逆に自分の中の人に見せたくない部分を隠すことが可能になる。そうすることによって人は他者に対して理想的な印象を与えようとするのである。加えて、他者が自分の意図を汲み取って行動してくれるように印象を与えることすらも可能とする。たとえば迎え入れられた部屋がとても清潔に保たれ、ものの配置から飾りまで完璧に整頓されていたならば訪問者はまず礼節を欠いた行動はできないだろう。むしろ行動のひとつひとつに丁重さを伴うこととなるに違いない。もしくはそれを想定してきれいな服装、整えた髪型、慎ましい態度で訪問するかもしれない。逆に特に整頓されることもなく自然な状態、あるいは乱雑に散らかった状態にある部屋へと迎え入れられたなら訪問者は丁重さを発揮することなく、自然に近い状態で部屋にいることになるだろう。または同じくそのことを想定してあらかじめリラックスした外見や服装、態度で訪れる。このようなことは前節で挙げた Goffman (1959=1974)が述べるオーディエンスに関する考え方とおおり、推論でしか人を判断できないために相手に関して持っている情報量に左右されるからである。

Goffman (1959=1974)は上で述べたような外見、態度、舞台装置という 3 つの要素を外面と呼んだ。これらの要素によって作り上げられた結果が人々に呈示される自己そのものだという。それゆえに人々は呈示される 3 つの要素に少なからず整合性を期待する。人が周囲の人間に呈示したものに矛盾が生じるということは投げかけられた定義の攪乱を引き起こすからである。そのために人は偶発的な出来事に注意を払い、未然に整合性が崩れるような事態を防ぐための予防策を講じるのだという。また、行為を受ける立場に立った人

も整合性を欠くことによって生じる混乱を防ぐような察しを行い、行為が何事もなく行われるようにするのである。このような行為者と行為の受け手双方の努力によってコミュニケーションの場は保たれているのだという。

部屋における印象操作としては表舞台と舞台裏という考え方を Goffman (1959=1974)は述べている。表舞台とは通常のコミュニケーションの場である。これに対して舞台裏とは表舞台で表現されるものを作り出すための道具や衣装が収納される場所だという。これを駆使することによって表舞台における表現が可能となり、自己にとって都合のいい印象ができあがる、もしくは無理矢理でつち上げられるのである。つまり舞台裏とは都合の悪いものを隠すための場所であり、他者には寄り付かれにくい場所だという。違う言い方をすれば表舞台で演じられる自己の像とは全く違う部分が形作られて表現されているのがこの舞台裏という場所にあたる。また、この舞台裏とはすぐに切り替わるもので他者を招く前の自分にのみさらけ出された部屋は舞台裏としての働きをするだろう。他者を招くことになり、人の目に触れる準備ができてからはじめてそこは表舞台に切り替わる。掃除をすることも物を整頓することも人を招くため、自己の印象操作をするための行動なのだ。もしくは普段から自分はこのような人間と思われているから部屋もこうあるべきというイメージを持って部屋を作るのである。このような努力から部屋における自己に都合のいい状態が作り出される。そして部屋同様に他の要素も整えていくことで呈示したい自己は完成するのである。つまり、自己の理想的な側面を空間に投影するということになる。それと同時に理想的な一面の裏側、人に見せることができない部分もまた舞台裏に表れるのである。ゆえに自己を表現するということは同時に自己の秘密を隠すことにもなるのだ。これらが私との関係性の中でどのように表れるのか探ることが重要な点となる。部屋が本当に表舞台として都合のいいものだけを見せているのか確かめることが必要である。

### 3 部屋が呈示するもの

#### 3.1 訪問と撮影による調査

各々の部屋が訪問者である私に対して呈示するものについて探ることを目的として実際に一人暮らしをする知人たちを訪問させてもらった。もちろん事前に約束を取り付けたうえでの訪問であり、あくまで私への部屋からみることのできる自己呈示を探るものである。約束を取り付けるときの反応や態度も貴重なデータとして考える。そして実際に訪問しその際に部屋が示すものを保管し、データとして残すために彼らの主な生活空間となる部屋を四方向から余すところなく撮影させてもらった。これによりそのときの私の主観のみでなく現在の私が客観的な視点で部屋を見直すこと、考察することが可能となった。これが訪問と撮影という方法による利点である。私を迎えるにあたっての部屋の状態を確認し、乱雑さの度合いから清潔さの度合いまでチェックすることができる。また、他の人にはない目立った特徴があるならば逐一記述していく。この方法による写真から知人の部屋の特徴や状態を読み取り、ひとりひとりの個性と全体の傾向を確認して考察したい。なお、この調査方法は担当教員のアドバイスによるものであり、部屋に着目して自己の呈示を考える本稿には必要不可欠なものとなった。

この調査に協力してくれた私の知人たちだがそれぞれ京都・大阪に一人暮らしをする学生たちである。いずれも同じ身分ではあるが同じように学生生活を送っていても多くの相違点を部屋から見つけることができたことから逆に部屋が見せてくるものについて調べるには都合が良かったと考える。彼らは総数 10 名で小学校時代からの付き合いになる親友から中学校時代での部活仲間や高校の部活仲間、大学の友人、ゼミの仲間、アルバイトの同僚と付き合いの長さは一様ではない。もっとも付き合いの長い人は 16 年、もっとも短い人は一年足らずだ。それゆえに彼らについて持っている情報量は大小さまざまである。私に対する感情も全くのバラバラでそれぞれ違う集団にて関わる人たちばかりだ。もちろんこういう付き合いの長さも調査において重要な要素になると考えて人選した。なぜなら部屋による自己の呈示とは隠すことが根本にあるのではないかと仮定するからである。情報量が多い人間と情報量が少ない人間でどれほど部屋の状態に差が表れるかということはこの調査において重要な点となる。特に大学からの付き合いの人間とそれ以前の人間との差、もしくは親しさによる明らかな差が部屋の状態に表れるのではないかと考えて調査に臨んだ。

また、事前の約束を取り付ける段階から各々の反応には個性があり、部屋を見せることへの複雑な感情が見て取れた。実際約束から訪問まで長い期間を必要とする人もいれば約束した当日に撮影に応じてくれる人もいた。これらもその人の私に対する感情や人となりを表すものとして考えられる。特に極端な人ではこちらの依頼に対して二週間掃除や整頓に時間をかけた人もいた。そのような訪問前後の様子や対応、私との関係性についても触れていく。それらを重ね合わせた結果について次節から述べる。

### 3.2 訪問と撮影の結果

前節にて述べた 10 人の学生の部屋を訪問した結果と撮影した写真について報告する。なお、彼らについて本稿ではそれぞれ A 君、B 君、C 君、D 君、E 君、F 君、G 君、H 君、I 君、J 君と呼ぶこととする。

#### A 君（アルバイト仲間）の部屋



正面



右奥



左奥



右手前



左手前

上に写真で示した A 君の部屋に見られる特徴としてはものが所定の位置に片付けられていることである。特に本棚は全てきっちりと本が並べられており、全く乱れたところはない。服もきっちりとハンガーに掛けられ、乱れたところが存在していない。彼とは今回訪問した中でもっとも付き合いが短く、お互いが持っている相手についての情報量が少ないこともあって私に対して警戒するところが多かったものと思われる。また、実際に彼の部

屋を訪ねたことがこれまでになく、はじめてだったことも要因であると考えられる。関係性においてもアルバイトの同僚という限られた中で交流を持つ仲間ということから彼について親密な関係であるとは言えない。自分についての情報量が相手に少ないときの警戒心、イメージの整合性を保とうとする働きが部屋に表れた結果が上の写真に見られる状態の部屋だろう。実際私は私の持つ彼の情報と部屋に整合性を確認し、A君らしい部屋であるところの部屋に入った瞬間感じた。特に彼がアルバイトにおいて日々見せてくれる真面目なイメージとジャンルを問わずに本を好み、熟読しているということから並べられた本には納得するものがあつた。このA君の部屋についてはイメージとの整合性を保つために多くのものが隠されている、または整えられているように感じる結果が得られた。

### B君（中学校からの友人）の部屋



左奥



右奥



左手前



右手前

B君の部屋もA君同様乱れた点もなく清潔な状態を保っている。本が散乱することもなく衣服が落ちていることもなく、きれいな状態である。訪問の約束を取り付けてからやや時間を要したこともあり、片付けにかなり気を遣ったものと思われる。彼については以前住んでいたところには何度も訪問していたのでよく知っていたが今回は引越しをしたためにかかなり雰囲気が変わってしまい、きれいな状態が逆に不自然に感じられた。付き合いも長く、よく知る仲であるだけに彼の部屋については予想外な結果となった。しばらく交流がなかったことがこのような形で影響したとも考えられる。また、訪問までに時間がかかったことも部屋をきれいな状態にするための努力に割いたものであると解釈できる。特に本を全て片付けて本棚に収納しているところや折りたたみ式の机を隅に寄せておくなどの行動を見るとかなり意識して部屋を整理し、今回の訪問を迎えたようだ。

### C君（高校での部活の後輩）の部屋



正面



左奥



右奥



左手前



右手前

C君に関しては全体的に整頓されてきれいな印象である。布団もまとめられ、きれいに整頓されている。クローゼットもぴっちり閉じられ、触れてはいけないような印象を受けた。C君はひとつ年下の後輩ということもあって約束にもすぐ応じてくれたうえに部屋も整頓されていた。やはり私に対する警戒心が部屋におおくのものを隠すようにさせたようである。とりわけ目立つのはクローゼットで開けることが許されない、開けないことを期待するように感じる。先輩と後輩という間柄が多く部屋の状態に影響したものと思われる。また、服や勉強に関するもの、個人的な遊び道具など私の知らない部分に関しては部屋には見られなかった。唯一目立つものといえば左奥にあるテニスバッグのみである。これについては私と彼が高校時代の部活動において先輩後輩の関係にあることから既に知れていることゆえに隠されることがなかったものと思われる。細かい点ではあるが彼の内面と外との境界が部活動というところで私と区切られていることが分かる写真と言える。もし私が単なる学校の先輩ならテニスバッグも写真にはなかったかもしれない。自己を部屋から表現するには相手との関係性、特にC君の場合は部活動という集団の中で表現してきた自分との関係性を維持することが必要だったものと考えられる。



### D 君（高校からの友人）の部屋



右奥



右手前



左手前

D 君は訪問に関して特に嫌がることもなく応じてくれた。実際に訪問したところ衣服を掛けるなどの片付けはしてあるが写真から分かるように大幅な片付けも行わず、ゴミの袋などもそのままの自然体に近い形の部屋だった。高校の部活時代からの付き合いの長さ、お互いを知る情報量の多さからこのような状態の部屋を見せることが可能だったものと思われる。特別な片付けを行ったような印象はまるで感じなかった。この部屋を訪れたこと自体は初めてだが特に格式ばったこともなく、自然な状態で迎えてくれた。

### E 君（大学の同級生）の部屋



正面



右奥



右手前



左手前

E 君の部屋はきれいに整頓されているがノート、文房具その他出しっぱなしの状態だった。やや散乱した印象を受ける状態である。彼は訪問に関しては時間をとってから許可を得ることができた。やはり親密さが部屋を見せるということについて関連を持っているのだろう。付き合いが短く、大学でのみお互いを知る仲であることが E 君の部屋に警戒心を持たせたようだ。彼はちょうど勉強に忙しい時期だったために勉強道具などを散乱させていた。だが、勉強道具は散乱しているのに他のものは特に乱れることなく、右奥の写真には本がしっかり整頓され、左手前の写真には服がきれいに掛けられている。ここにこの部屋の特



徴と E 君の意図が感じられるように思えた。

### F 君（大学の同級生）の部屋



正面



ベッド下



右手前



左手前



右奥

F 君は訪問時にかなり時間をとって片付けに励み、ベッド下まで整頓していた。A 君や B 君ほどではないが訪問に対してかなりの反応を見せていた。なお、右奥の写真だけ夜だがこれは撮り忘れたために再度訪問したからである。その際にもかなり片付けに時間を要したことから彼にとって私の知らない、隠したい一面が普段の部屋には多く存在するのではないかと推測できる。大学時代からの友人ということで比較的付き合いは短いゆえに隠すべき部分が多くなったのだろう。衣服や遊び道具など私的なものは全て片付けられていた。それにも関わらず F 君が趣味として好んでいるというギターは片付けることも隠すこともなく堂々と置かれている。これは自分を表現するうえでの小道具として印象付けるためのものと言える。また、大学でなお、彼の部屋を訪問することは多くあったがその都度玄関先で待つように指示された。このようなことから印象を操作するために部屋は大きなポイントになっていたことがうかがい知れる。クローゼットなども開けたことを一度も見たことはなく、彼の外で表現する自己と内側にある自己とはかなりの差があるのかもしれない。もしくは私が知る彼はほんの一端に過ぎないのだということがよく分かる。また、衣服な

どもベッド下などに完全に片付けられていて訪問者に隠す働きが強く表れている部屋という印象を持った。

### G 君（大学の同級生）の部屋



右奥



左奥



左手前



右手前

G 君の部屋はものが山積みで全く片付いてはいなかった。本や衣服は山積みでありあまり整頓された印象はない。G君は片付けて迎えてくれたつもりらしいが私にはかなり乱雑な状態に映った。だが、約束から訪問の許可がおりるまでの時間がもっともかかったのはこのG君だった。ゆえに彼としてはかなりの努力を持って部屋を整え、私を迎え入れてくれたものと思われる。また、彼は大学からの友人ということもあり、私に対してまだまだ見せていない面が多く部屋の中にあるのだろう。しかも彼は部屋に他人を入れることを非常に嫌う。今回は特別にいれてもらったが他人に見せないことを前提としているために他の大学からの友人に比べて片付けてもいまだ乱雑な状態だったのだ。右手前の写真のようにタオルや下着を干す。左手前の写真にあるようにものを積み重ねるなど部屋を他者に見せることを前提としていない印象である。普段プライベートな場所である自分の部屋を相互行為の場へと変化させるにはそれ相応の努力を必要としたものと思われる。加えて大学など外の世界における彼の外見や態度はきれいなものを好む潔癖な印象を私に与えていたためにその印象を維持するための時間が他の人々に比べてもっと多く本来必要だったのだろう。ゆえに少し印象とは整合しない部屋と感じた。

## H 君（高校時代からの友人）の部屋



正面



左奥



左手前



右手前

H 君は高校の部活仲間であり、また同じ大学に通って長く親しい関係を持ってきたということもあり、お互いに多くの情報を持っている。また、部活動と大学以外にもクラスメートとしての一面も互いに知っているということで多くの集団でお互いを知る仲だ。そのため連絡をするとすぐに訪問する許可を得ることができた人物である。H 君については何も普段と変わらないような状態で迎えてくれた。幾度と無く来た部屋ということもあるがあらためて写真によって客観的に見ると片付けていないことはともかくクローゼットまで開けたままという状態でまさに何も隠さないような印象すら受ける。机、コタツ、床どれをとっても特に警戒心もなく迎えるにあたる準備などほぼ行っていなかったようである。パソコンは開けたまま、コタツの上はものであふれており、乱雑で生活感のある印象である。部屋は隠す機能が多いように思うが関係性しだいでは多くを見せてくれる場合もあるということが見て取れた。だが、みながなにかしら隠す部分を持ってきたためにクローゼットまで開けたままで迎えてくれたH君は今回特殊な事例である。隠すことでなく見せることがどのような印象を与えるかについては4章で考察する。

## I 君（大学の同級生）の部屋



右奥



左奥



右手前



左手前

I 君は大学時代もっとも部屋を行き来したであろう友人である。家も近く手軽に交流が持てたためお互いについてもよく知っている。それゆえに普段彼の部屋がどのような状態かよく知る私に対してはたとえ撮影をするということと言っても動じずそのまま応じてくれた。そしてその部屋は右奥に見えるように衣服が垂れ下がり、ゴミや段ボールが散乱した状態である。彼については普段から自分はこのような人間であるということを周囲に伝えているために印象における整合性は保たれている。他の人たちとは違いゴミも布団も衣服も何一つ隠れてはいないがそれが逆に親密さを表し、彼の築き上げてきた人間性を呈示している。むしろ普段の彼に合った状態、彼のキャラクターというものを部屋で表現しているのだと受け取れる。きれい好きな印象を人に与えてきた人やお洒落な印象を与えてきた人とは違う彼らしい自己の表現がまさに部屋に表れているようだ。これもまた部屋が持つ能力が発揮された結果であると考えられる。大学に入って1年足らずのころに訪れたI 君の部屋がこの写真にあるような状態とは程遠く整頓されていたことから考えてこのように乱雑な状態の部屋を彼が私に対して見せられるようになったのはそれだけ多くの交流を通してお互いに信頼を得ることができた証拠と言えるだろう。その結果として多くの秘密とするような部分もさらけ出すことができたものとする。



### J 君（小学校からの友人）の部屋



正面



右奥



左手前



左奥

J 君は今回訪問をお願いした人々のなかでもっとも古くからの友人である。小学校時代からの友人ということでお互いに知り尽くした関係だ。彼の部屋は特に大きく片付けることもなく衣服などがカゴに入れられたまま放置されている。その他多くのものが窓際に集められ、形式のみ片付けたような形になっている。衣服に限らず布団や雑貨においても特に整えられた状態ではなく、私への恐れや敬意は感じられない。また、訪問に関してもすぐに了承を得ることができた。彼については普段は真面目で清潔感のあるイメージを示す人間であるがやはり予想以上に相手に対する情報量が部屋の状態に影響しているようだ。隠す必要がないという場合の部屋が逆に多く相手に情報を提示するということの表れであると思われる。

ここまで個別に 10 人各々の部屋に関して述べた。実際に訪問したときには相手に対して気を遣うことや会話をすることもあって部屋を集中して見るということではできなかった。部屋について調査するとはいってもやはり主観のみで他人の部屋を観察することは難しいと実感した。写真によって客観的に見ることではじめて冷静に部屋を観察できて多くの発見があった。そして考えていたよりも結果は複雑であり、予想外の状態にある部屋も少なくはなかった。4 章ではこれらの特徴や関係性をまとめあげ、比較する中で全体の傾向や特徴について考察したい。また、部屋と人間について自分なりの考えを導き出したいと思う。

## 4 部屋の比較と考察

### 4.1 部屋と交友関係

3章でひとりひとりについて見てきた結果より部屋が我々に示そうとするものがどのような傾向を持っているのか、人にとって部屋とはどのように他者に見せられるものなのかを考察していく。特に部屋をどのような状態にする必要がどのような人にあるのか客観的な視点から見ていきたい。

表1 部屋の特徴と人間関係

	散乱	イメージ	待ち時間	交友	付き合い	関係
A君	浅い	整合	短い	浅い	1年	アルバイト仲間
B君	浅い	不整合	普通	普通	10年	中学校からの友人
C君	浅い	整合	普通	浅い	6年	高校の後輩
D君	普通	整合	短い	普通	7年	高校の友人
E君	普通	整合	長い	普通	3年	大学の友人
F君	浅い	整合	長い	深い	4年	大学の友人
G君	普通	不整合	長い	深い	4年	大学の友人
H君	深い	整合	短い	深い	7年	高校からの友人
I君	深い	整合	短い	深い	4年	大学の友人
J君	深い	整合	短い	普通	16年	小学校からの友人

今回の調査から見てとれる部屋の状態と私との関係や訪問にかかった時間などの背景となった部分をまとめたのが表1である。項目については部屋がどれほど散乱していたか示す散乱、対象の人物に持っていたイメージと部屋から感じたものが整合するかどうか、約束から訪問まで待たされた時間、現在の交友、付き合いの長さ、関係を採用している。これをもとに部屋による自己の呈示の特徴を探る。

この表1からまず目に付くのは訪問までにかかる時間が大きく部屋の状態に関係することである。まず部屋の散乱が深い人間は全て約束を取り付けてから実際に訪問を許すまでの時間が短い。3人全てがいますぐ来てもらってもかまわないという返答をしてきた。つまりこれはほぼ普段どおりの状態を見せることになっても自分には悪い影響は何もない、信頼関係が崩れるようなものは部屋にないと感じているということだろう。実際この3人

の部屋は衣服やゴミなどの私物が多く部屋に点在している。だが、それが逆に私には緊張感を与えず、過ごしやすい印象を与えた。

このことについて正村俊之（1995）は秘密を意図的に相手に伝えることが信頼に繋がる行為だと述べている。秘密を意図的に見せるということは相手が秘密を他者に話さないという信頼があってはじめて成り立つ行為である。ゆえにそれをあえて表現するということは相手への信頼を示すことになり、結果としてお互いを陰悪にするような重大な秘密でない限りはお互いの信頼を深めることができるのである。また、Goffman（1959=1974）も集団における自己呈示に関して集団を秘密結社のようなものとして定義している。集団とは共有する秘密を守ることで集団としての自己呈示が行えるとのことである。このように秘密とは相手と自分を分ける境界だが、秘密が少なくなるほどに相手との信頼は深まる性質を持っているのだ。

ゆえに散乱しているからといってまずいことはなく、むしろ彼らは訪問者への信頼を部屋によって示していると言える。部屋が秘密を多く抱える場所であるがゆえに秘密を見せることも容易なのだ。H君とI君についてはその交友の深さが要因となって既に多くの情報を得ているために散乱したままの部屋を呈示することが可能となったものと考えられる。また、J君は付き合いの長さがある。それぞれに言えるのは複数の集団で関係を持ってきたことである。もちろん集団では多くの秘密を共有している。過去からの信頼関係と秘密を共有したことが現在の部屋の姿にも表現され、より信頼を期待することに繋がったのだとこれらの部屋については考えられる。

まずH君に関しては3章で触れたようにクローゼットを開けたままにするほどの状態である。理由としては高校ではクラスメートであると同時に部活仲間として勉強に関してもプライベートに関しても多く接触してきたこと、それにプラスして大学生活でも同じ大学に所属することであると考えられる。多くの集団で交流を持つということがお互いの秘密を共有することに繋がり、部屋についても隠すものが少なくなったようだ。

I君に関しては付き合いが短いが大学の授業とゼミ、住居がそばにある関係からプライベートでの交流が多く部屋の秘密が薄れたことが要因と考える。事実、大学1回生と2回生のころは部屋を訪問しても今回のように乱雑ではなく、整頓された状態が多かった。訪問についても了承を得るまで時間がかかることも少なくはなかった。大学の授業のみの付き合いでは分からなかった内面を知ったことが部屋にそのまま投影されたと理解できる。関係性の変化が部屋にも表れ、より深い信頼を求められるようになったと考えられる。

J君は大学に入ってからあまり会う機会がないものの今回選んだメンバーの中でももっとも古い小学校一年生からの付き合いであり、お互いの秘密を知っているということが原因にある。現在の付き合いの深さだけが部屋に影響するというわけではなく、現在は交友が深くなくとも以前に秘密となるような一面を知らせてある相手には部屋における警戒心はほとんど表れないということが言える。

同じように長い付き合いを持つ人間にB君がいるが彼については大学時代の接触がほぼないことから現在のB君を私がよく知らないということ、J君と違い中学生からの付き合いであることが浅い散乱に部屋を留める原因と推測できる。また、高校の後輩であるC君についても同じことが言える。部活動以外での関わりが少ないことが整頓された状態の部屋に繋がったものと考えられる。

ここまで語った付き合いの長さ、深さと部屋の状態の関連についてはもっとも長い付き合いを持つJ君ともっとも付き合いが短いA君を比較すると分かりやすい。二人とも短い時間で入室を許可し、私が彼らに持つイメージと一致する状態の部屋を見せてくれたがその散乱具合は正反対である。J君は先ほど語ったように子供時代から私と接してきた経験が大きく作用した結果だ。対するA君にとって私は浅く広い付き合いのなかの一人である。私はA君についてアルバイトという枠の中でしか知らないしA君もアルバイトで働く私しか知らない。そこで作られた印象のみが彼について知るところである。ゆえに彼はそのような人間に見せてきた自己を守らなくてはならない。

Goffman (1959=1974)はパフォーマンスにおいて重要な外見・態度・舞台装置を外面とした。この外面に整合性が保たれないとパフォーマーは恥辱を感じる。正しく役割を演じられていないことを悟られてしまうからだ。部屋もまた舞台装置として存在し、パフォーマーの役目に合った姿をとる。そうして自己は他者に自分にとって都合のいい部分のみを表出するのである。外面の整合性が取れなければすなわち役割を演じきれないことへの不信感が受け手に芽生える。本当に役割どおりなのか、見た目どおりの人間なのかという疑念が他者に生じてしまうという。

A君の場合はアルバイトにおいて真面目で仕事ができる男である。少なくとも私にそう印象付けられるほどの働きを見せている。ゆえに短い期間でも片付けられた部屋を見せる努力を行い、浅く広い付き合いを持つ相手に見せる必要があるのだ。そしてもうひとつ重要な点は付き合いの長さや深さのみならず私とA君はアルバイトという間のみの関係ということだ。アルバイトとは交友も生まれるがそのほとんどは仕事に関するものである。仕事



中とは店員としての理想的な自己を多く呈示すべき場所である。少なくともお客さんに対しては店員としての役割を演じなければいけない。そして店員の仲間に対しては仕事に対する姿勢を見せつける場所だ。やはり仲間にとっても有能なこと、勤勉であることは自分に対する信頼に繋がる。そのような店員としての役割がアルバイトという関係性から印象付けられているために隠すべき部分は多くなり、部屋を見せることについても隠すことが多く必要になるのだと考えられる。つまり役割を自分の部屋にまで持ち込まなければ印象を守ることができないということが非常に整頓された部屋を作り出した結果だと考えられる。

逆にJ君は多くの集団とともに属してきたことから多くの役割をこなす彼を見てきたし、私も見られてきた。そうすることによってお互いに現在の印象が形成されている。ひとつの役割をこなすなかでの関わりではその役割という外面しかほとんど現れてこない。J君は多くの役割をこなす中で私の内面を理解しているところがある。このような理由からアルバイトにおいてのみ接点を持つことと小学校時代から接点を持つということが散乱度のみを分ける結果に繋がったようである。

最後にイメージと部屋の整合性が感じられなかったケースに関して考察したい。B君とG君は普段私が彼らから受ける態度や外見と部屋から受ける印象に整合性が持てなかった。B君の場合は予想外にきれいに飾られた部屋に戸惑いを抱き、G君の場合は大学で見せる潔癖な態度に比べて部屋がやや乱雑だったことにその理由がある。

B君に関しては大学における自己のあり方が部屋に表れたということで説明ができる。上で述べたように大学やアルバイトからの付き合いに対応するためには広く浅い関係に対して自己のイメージを守る防衛策が必要だからである。必要以上に飾られた部屋は今回特別に作られているとは考えられない。この部屋のありようが表現するのはそのように多く大学など新しい付き合いの人々に対するものと言えるだろう。

対するG君は長い時間をかけながらも大学におけるイメージまで部屋を作ることができていなかった。このことは Goffman (1959=1974)が述べる外面によって印象操作を行う目的が他者の行動を統制することで利益を得ることにあるという考えで解釈しにくい。これについてはG君が自分の部屋を他者に見せないという方法を大学生活で続けてきたことに原因があると思われる。部屋は仕切られた性質を持つゆえに個人とともに移動できない。ゆえにあくまで背景としての存在であり、自分の部屋という個性を発揮する場所を他者に見せないことも他者に疑念や不信を抱く可能性はあるけれども可能ではある。今回の訪問

については無理を言って了承を得たがその結果として片付けきれない部屋を呈示する形となったようである。ゆえに大学におけるG君との整合性は取れなかったものと考えられる。無理をしてでも整合性を保つことをしなかったという結果から大きくイメージを壊すようなものを隠すことができたならそれがかまわないという考えがG君に働いたことが分かる。つまり、自分にとって都合のいい印象を部屋によって与えるよりも最低限の秘密のみを隠すということが重要事項なのだとこの結果から推測できる。

#### 4.2 部屋による自己呈示の類型

Goffman (1959=1974)は外面による印象操作を他者の行動を統制することで自分の利益を得ることが目的だと述べている。この節ではこの考え方を念頭に置いて考察していきたいと思う。

ここまで見てきたように大学生など他者への意識が強い年齢から知り合った人間は部屋を操作することに尽力する傾向が強い。また、大学生より前に知り合った人間であっても複数の集団での関わりを持っていない場合は多くの秘密を隠して自分をより良く見せていた。逆に大学生からの付き合いであっても大学以外の集団で秘密を共有しあう人間については印象を良くするために部屋を操作するような動きは感じられなかった。このようなことから他者との関わりが自分の部屋という固定された空間にまで強い影響を及ぼしているのは確かである。そのような個人の働きで分かった2つのタイプを紹介したい。

まず部屋による自己呈示ではあえて秘密となる部分を見せつけることで相手に安心と信頼を与えるタイプがいる。D君、H君、I君、J君がこれに該当し、信頼を部屋によって示すと同時に相手により強い信頼を求めるのがこのタイプの特徴である。このタイプの部屋を見せた人間は複数の場においてお互いの人物像について理解がある。学校での姿だけでなく部活動や日常生活まで交流があり、多面的に相手を知っている場合にこのような部屋を見せることができるものと思われる。これは信頼の再確認と同時により深い親しみを求める行動と言える。信頼と言う利益を得ようという意味でこれは他者の行動を統制する行動であると言える。隠すよりも見せることで自分と他者のつながりを強めようという姿勢からこのタイプは積極型と呼ぶことにする。

次に強調したいものを全面に押し出してそれ以外は隠し通すことで自分をより良く見せようとするタイプが存在する。A君、B君、C君、E君、F君、G君がこれに当たる。彼らは各々が自分の印象を大事にし、整頓された部屋に一部強調したいものを残すことでその

印象を強めている。A君は大きな本棚、B君は部屋の雰囲気、C君はテニスバッグ、E君は勉強道具、F君はギターがその役目を負っている。E君は隠すことのみに終始している。これらは典型的に大学生以降の付き合いや交流が浅い人間に多い。交流は深くても1つの集団の中でしか相手を知らない場合や交流が浅い人間がこのタイプには当てはまる。意図的かどうかはともかくこれは完全に自分にとって都合のいい印象を他者に与えようというものだと考えられる。都合のいい印象を与えることは当然自分の利益に繋がる。まず隠すことで自分のイメージを崩さないことを中心とすることからこのタイプは消極型と呼ぶことにする。

このように自己呈示に関しては大別して積極型、消極型の部屋があるということが結果より分かった。だが、これはあくまで他者の行動を統制することがその目的となっている。他者の目を意識することがあってはじめて積極型か消極型のいずれかとして部屋は十分な働きを見せるのだと考えられる。つまり、個人にとっての内面を表すように考えがちであるが部屋とは他者によってその姿が形作られるものと言えるだろう。個人の部屋とは他者がいてこそ自己を表現できるのである。

## 5 結論

本稿では個人の部屋が人とのつながりのなかでどのような働きを見せるのか、個人の人となりをもどのように表現する能力を持つのか探ることを目的とした。個人の部屋とは普段隠された個人的な空間であり、しかもそれは外見などと違い物理的に固定されていることから隠す能力が強いものと考えた。ゆえに部屋は個人が見せたいものだけを見せ、都合の悪いものは全て隠す機能を持つということを仮説とした。だが実際に部屋を訪問していくと隠さないということも部屋が持つ重要な機能であることがよく分かった。もちろん隠すことによって自分の印象を壊さないようにする働きも多く見受けられる。つまり、部屋の働きとは強く相手との関係に根付くものだったのである。

関係が深い人間は部屋を整頓するなどといった行動はほとんど行わない。これは相手との関係をそのまま部屋に示して相手に伝えているからである。相手への信頼を部屋の姿によって投げかけることが本人も気づかないままその部屋の人間の狙いとなる。そしてこのように整頓されない部屋を呈示することには印象を壊さない相応に親しい関係が必要となる。ゆえに大学生以降の人間にはこの条件は難しく、日常生活や部活動など多面的な付き合いの人間に多い。

逆に関係が浅いなら自分の見せたいもののみを強調し、部屋のほとんどはきれいに片付けられて日常生活の痕跡は全て隠されている。大学生など浅く広い付き合いの中で常に他者の目を意識する人間はこのような部屋を呈示する傾向が強い。これは他者を意識した行動が中心となる年齢では常に秘密がつかまとい、自分の印象を守る働きが強いためである。

このようなことから部屋が人との交流において成す働きとは他者との関係性をうまく呈示するものであることが分かった。だが部屋は自分とともに動き回ることにはない不便なものだ。事実、第一印象や外見で人を判断することが世の中では常識となっている。外見や態度は常に本人と動き回れるため、多くの人に自己を呈示することができるからである。ある程度の付き合いの人間でないと個人の部屋を訪問するのは難しい。だが、だからこそ部屋が示すものは私たちがこれから人と付き合いしていくなかでよく知るはずの他者の隠れた内面を知るために重要なものとなるだろう。また、自分が他者に対してどのようにありたいのか部屋を通して考えることが自分自身の隠された内面に近づくきっかけとなるだろう。

## おわりに

自分の部屋を見つめると自分が大学生活において肩肘を張ってきたことが今になってよく分かった。私は自分自身がきれいな部屋を好むため、部屋にこだわりを持っているものと以前は考えていた。だが実際のところはいつ他人が来るか分からないという不安や良い印象を持たれたいという感情が部屋の姿に投影されていたのだと思う。これは自分自身の知らない一面を発見したような思いだった。また、友人たちについても部屋を通して私に対する感情を感じることができ、多くの新しい一面が発見できた。これからも多くの出会いの中で同じように人々と交流していこう。知人の家を訪問もするだろう。そんなとき、部屋が示すものを理解して動けるような人間でありたいと思う。

最後に本稿は友人たち10人の協力なくして実現できないものだった。訪問と撮影を許可してくれた10人に感謝を述べたい。

## 参考文献

E.Goffman, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday & Company. (= 1974, 石黒毅訳『行為と演技——日常生活における自己呈示』誠信書房)

G.H.Mead, 1934, *Mind, Self, and Society*, The University of Chicago Press. (= 1973 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店)

永房典之, 2008, 『なぜ人は他者が気になるのか? —人間関係の心理』金子書房

井上俊・船津衛, 2005, 『自己と他者の社会学』有斐閣

小川英司, 1997, 『G・H・ミードの社会学』いなほ書房

正村俊之, 1995, 『秘密と恥 日本社会のコミュニケーション構造』劉草書房

(40字×30行 本文 27 ページ 400字詰め原稿用紙 55 枚)